

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	2024 年度
氏名	馬場薗美雪	指導教員 (主査)	諏訪絵里子准教授

論文題目	親の夫婦間葛藤が青年の対人不安に与える影響 ——性役割による調整効果——
------	---

本文概要	
【研究目的】	近年、夫婦間葛藤に関する問題が増加しているが（厚生労働省, 2021），親の夫婦間葛藤は子どもにネガティブな影響を与えることが示されている。夫婦間葛藤は子どもが青年期に生じやすく，子ども自身もこの時期は親の関係性に敏感になりやすい（宇都宮・神谷, 2016; Daives et al, 1999）。一方，青年期は家族以外の他者との関係性を構築していくことが求められるが，同時に対人関係に困難さを抱えやすい（日本学生支援機構, 2021）。対人関係の質や対人関係への不安は，親の夫婦間葛藤から影響を受けることが示されている（Schwarz et al., 2012 ; Weymouth et al., 2019）。さらに，青年期は女子の方が親の夫婦間葛藤に脆弱で，葛藤に巻き込まれることで女子は男子よりもネガティブな影響を受ける（山本・伊藤, 2012）。Daives&Lindsay(2004)は，この性差について性役割の関連を示唆している。本研究では，青年期における親の夫婦間葛藤と対人不安との関連に性役割がどのような影響を与えるかを明らかにし，青年の対人不安の予防や介入に役立てることを目的とする。
【研究方法】	大学生 182 名(男性 56 名，女性 126 名，平均年齢=19.99 歳，SD=1.25) を対象に以下の質問紙を実施した。①フェイスシート (性別，年齢，両親との同居状況) ②子どもが認知した夫婦間葛藤尺度（山本・伊藤, 2012）：子が認識する夫婦の葛藤の深刻さの程度を「親側の要因」，子が葛藤状況に巻き込まれている程度を「子側の要因」をとして使用した。③日本版 Social Interaction Anxiety Scale (金井他, 2004) ④Bem Sex Role Inventory 日本語版(以下，BSRI：東, 1991)
【結果・考察】	BSRI の探索的因子分析の結果，先行研究と同様に男性性役割 ($\alpha=.91$)，女性性役割 ($\alpha=.92$) の二因子構造が支持された。男女間で対応のない t 検定を行ったが，性役割，夫婦間葛藤，対人不安のいずれにおいても有意な差は見られなかった。そのため，現代の青年の中にも従来の性役割の認識はあるが，実際の性別と関連するものではないと考えられる。また，男女で親の葛藤や対人不安に差があるとは言えなかった。性別ごとに各因子の相関分析を行った結果，女性性役割と男性性役割の相関が女性は男性よりも弱かったことから，女性は男性よりも獲得されている性役割に偏りがあることが推測された。次に，相関分析の結果を踏まえて，対人不安を目的変数とした階層的重回帰分析を男女別で行った。説明変数として Step1 では性役割，Step2 では親側の要因，Step3 では子側の要因，Step4 では親側の要因と各性役割との交互作用項，Step5 では子側の要因と各性役割との交互作用項を投入した。その結果，男性では Step1 の決定係数が有意であったが，いずれの段階においても決定係数に有意な増分はなく，男性性役割が対人不安に有意な影響を与えていた ($\beta=-.70$, $p<.001$)。女性では，Step3 で有意な増分 ($\Delta R=.03$, $p<.05$) があり，男性性役割と子側の要因の対人不安に対する主効果が有意であった ($\beta=-.55$, $p<.001$ / $\beta=.21$, $p<.05$)。このことから，男性は親の夫婦間葛藤が対人不安に影響するといえないが，女性は親の葛藤の大きさに関わらず，その葛藤に巻き込まれると対人不安に繋がるといえる。また，男女ともに男性性役割は対人不安を減少させるが，性役割が夫婦間葛藤から対人不安への影響を調整するとはいえないかった。このことから，夫婦間葛藤の影響の性差は，従来の性役割の差では説明できないことが示された。青年期は親の夫婦間葛藤が対人不安に与える影響は限定的で，影響を受けやすい女性も葛藤状況に巻き込まれていると認識しない限り影響を受けないことが示された。つまり，両親への介入が難しい状況でも青年のみの介入で不適応の改善に繋がる可能性が示された。